

冷酷CEOは秘書に溺れるか？

プロローグ

病院には、独特の空気がある。

シャンデリアの煌めく吹き抜けの天井や、クラシック音楽が流れる待合室、所々にバランスよく置かれた観葉植物、壁面に飾られた大きな絵。

新しく建てられたばかりの総合病院は、まるでホテルのような雰囲気だ。

けれど、白衣を着たスタッフや、車椅子に座る患者さん、どこことなく漂っている消毒薬の匂いは、ここが病院であることを否が応にも知らしめる。

私、関崎凛は見舞い客専用の入り口をくぐり、腕に抱えたバッグを持ち直した。中身は仕事関係の資料と経済誌、経営に関する書籍類だ。

この病院の特別フロアに、私の勤める会社のCEOである溝口さんが入院している。彼は大手不動産会社を退職した後独立し、今の会社を築き上げた。事業内容は、不動産開発や地域再生、新しいビジネスモデルの提案など。様々な分野でイノベーション事業を手掛けるベンチャーだ。

シャッター街になりかけていた商店街を立ち直らせたり、過疎化が進む地域を再開発したり、売り上げが落ちた飲食チェーン店を盛り上げたり、といったことをしている。

生まれ変わったように活気ついた地域や、これまで以上に売り上げを伸ばした店舗などが出ると、その都度マスコミに騒がれるぐらいには知名度がある。

私は数年前に秘書課に配属され、ついこの間までCEO専属秘書だった。

どの会社のトップもそうだろうけれど、CEOである溝口さんもやはり仕事人間で——私は彼の秘書としてそばにいて、健康にも気を配っていたつもりだった。休むだけでは戻らない顔色の悪さに、無理やり人間ドックの予約を入れたのも私だ。

溝口さんは苦笑しながら『関崎さんがそこまで心配するなら』と人間ドックを受診してくれた。結果、彼はこうして入院することになり、私は彼の秘書として毎週末この病院を訪れては、会社の状況を報告していた。

院内を進み、特別フロアのある階でエレベーターを降りる。いつもはしんと静まり返っているナースステーションが、ほんの少しざわついていた。私は首をかしげながら、いつもと同じようにカウンターで面会者名簿に名前を記入した。

「そんなに素敵な人だった？」

「見るからに上等な男って感じだったわよ。帰る時にも見てみれば？」

ナースたちがささやき声で交わすその会話で、なんとなく落ち着かない雰囲気の原因がわかった。見舞い客にイイ男でもいたんだろう。

私の存在に気づいた年配ナースが、わかりやすく咳払いして会話を交わす彼女たちを窺める。私は知らぬふりをしてボールペンを置いた。ふと見ると、名簿の数行上に見覚えのある名前があつて

ドキツとする。

——つい先日会社で、溝口さんの長期休養と新しいトップの就任が報告された。面会者名簿には、神経質そうな字体で、その新CEOの名前が書かれていた。

「出てきたみたい！」

ナースステーションに駆け込んできた一人のナースが、同僚たちに小さく声をかける。彼女たちの視線がカウンターの外に向けられた。

特別フロアのある方向から、一人の男性が姿を見せる。

上質そうな濃紺のスーツに、均整のとれた体格を包んでいる。きちんと締められたネクタイには一分の隙もなく、硬質な空気がまとわりつく。一瞬で人目を引く存在感に加えて、端正な顔立ち。

普段真面目に仕事をしているナースたちの視線を奪うのも頷ける男だった。

彼はナースステーションからの視線を感じたようだが、気にしたふうもなく一瞥してそのまま私の横を通り過ぎていった。

瞬間、私の背中にぞくぞくと悪寒が走る。

会ったのは今日が初めてだけれど、私は彼を知っていた。

写真嫌いだという彼の画像は、インターネットにも載っていなかった。でも社内の誰かが写真つきの小さな記事を見つけてくれたおかげで、おぼろげながらも風貌を目にすることができたのだ。

また、写真以外の情報はかなり見つけられた。高校生の頃は全国模試でトップクラスだったとか、剣道の大会で優秀な成績をおさめたとか。留学先の大学でも経済関係の論文で学会誌に載った

だとか、ずっと海外で経営コンサルタントとして活躍してきたとかいう、華々しすぎる経歴も耳に入ってきた。

学生時代に数学オリンピックになるものに出場した経験もあるほど数字に強く、ありとあらゆるものを数値化して、データにすることによって経営改善をすすめてきたらしい。彼に救われた企業はいくつもある。

三十五歳の若さで様々な実績を残しているほど優秀なコンサルタントで、イケメンで独身と三拍子そろえば、社内が騒ぐのも仕方がないとは思っていた。それでも私は大半の噂を適当に聞き流し、あまつさえちよつと大げさなんじゃないかと考えていたのである。

でも——
「あれが、氷野須王……」

実物は、想像以上だ。二十九年生きてきて、こんな完璧そうな男に会ったのは初めてだ。

あの男が……今度、我が社のCEOとしてやってくる。

ナースステーションには一瞬でピンク色の空気が漂ったけれど、私の腕には鳥肌が立っている。……もしかして、完璧すぎて生理的に受けつけない——とか？

「できるだけ近づかないようにしましょう」
私は腕をさすりつつ、小さく呟いた。

特別室のこげ茶色の引き戸をノックすると、低くやわらかな声で「はい」と返事がある。その声

音で、私はほんの少し肩の力を抜き、室内に入った。

——大丈夫、思ったより溝口さんの声は落ち着いている。

溝口さんは考え事をしている時、声のトーンが落ちる。機嫌がいい時は明るい。そんな判断をすることも、もうないんだな、と思うと胸がつきんと痛んだ。

さつき氷野須王を目の当たりにして、彼が我が社のCEOとしてやってくるのだと実感してしまつたから……

「失礼します。おかげんはいかがですか？」

「こんにちは、関崎さん。体調は大丈夫だよ」

そうやって溝口さんは、私を安心させるような穏やかなほほ笑みを浮かべる。

——つい数ヶ月前まで、五十歳近いとは思えないほど若々しかった溝口さん。黒々とした艶のある髪も、がっしりとした体つきも、出会った頃からあまり変わっていなかった。わずかに増えた、目元の小さな皺しわだけが時の流れを感じさせたくらいだ。けれど今は、その面影が消えつつある。

「ついさっきまで氷野くんが来ていたんだよ。廊下ですれ違つたりしなかったかい？」

私は「いえ」とだけ答えて、持ってきたバッグをテーブルの上に置いた。

溝口さんの入院している部屋は特別室のため、大きなベッド以外にソファセットや簡易キッチンが設置されている。豪華な刺繍しゅうのカーテンやソファだけ見れば、この部屋は本当にホテルのような空間だ。

「持ってきた書籍は、こちらの棚にしまつて構いませんか？ 資料や雑誌はいつもの場所に置いておきますね」

「ああ、それで構わない。それに……」

溝口さんがなにか言いかけたので、バッグから中身を出していた手を、思わず止める。

「会社の資料はもう必要ない。関崎さんがまとめたこれまでの資料も合わせて、氷野くんに渡してくれるかな」

「でも！」

反射的に口にしたけれど、それ以上は言葉が出てこなかった。

だって、わかつていたから——いつか必要ないって言われる日が来るって。

入院して毎週末訪れる私に、溝口さんが苦笑していたのも知っている。

遠まわしに、毎週来る必要はないと言われても、私は『相談したいことがある。報告したいことがある』と食い下がり病室に来ていた。

私は絶るすがように溝口さんを見る。

そう、わかつている。

溝口さんの髪に一気に白いものが増えたことも、首筋が瘦やせてきたことも、声に張りがなくなってきたことも。

仕事をしている場合じゃない。会社を気にかけている場合じゃない。自分の体を第一に考え、病気と対峙たいじすることが今の彼には必要だ。

「会社はもう私のものじゃない。氷野くんに、そして君たちに任せた。だから資料は必要ない」

溝口さんの静かな口調に胸がざわめく。

——人間ドックなんて、すすめなきゃよかった？ でも、そうしなかったら病気はわからなかった。

とはいえ、こんな形で彼の隣を離れることになるなんて……

唇を噛くんで俯うつむく。

会社は溝口さんの手から離れた。そして後を引き継ぐのは、あの男——

氷野須王。

「その資料は氷野くんに渡してほしい」

「……はい」

「私を支えてくれたように、彼を支えてくれるかい？ 凛ちゃん」

私は、がばつと顔を上げて溝口さんを見た。

久しぶりに、そう愛称で呼ばれた瞬間——ああ、溝口さんはもう私の上司ではなくなつたのだと、私は彼の専属秘書ではなくなつたのだと思つた。

それじゃあ、今度は、あの男の専属秘書になる？

私があつた男を支える？

……なんとなく、嫌だ。私は溝口さんを支えたくてCEO専属秘書になつたんだもの。今はまだ、溝口さん以外の下につく自分なんて想像したくない。

だからって、今の溝口さんに『わかりました』なんて嘘をつくことも、『あの男を支えるのは嫌です』なんて本音を言うこともできない。

泣きそうな表情を隠して、私は秘書の仮面を張り付ける。

「私にできることは、精一杯努めます。溝口さんも、してほしいことがあったら遠慮なく言ってくださいね」

そして、にっこり笑ってみせた。

私の曖昧な返答に苦笑しつつも溝口さんは「じゃあ、時間がある時にはこうして、お見舞いにかけてもらおうかな。入院生活は退屈だから話し相手をしてもらえたら嬉しいよ」と言ってくれた。

……新CEOの専属秘書。命じられれば従うしかないのが会社員だ。

けれどあの男には、できれば近づきたくない気がする。

溝口さんと話しながら、私は心の中でなんとかならないものかと、あれこれ考えていた。

第一章 CEOと秘書の攻防

私が病院で氷野須王と会ってから三ヶ月――

「私！ もう無理です！」

CEO専属秘書が業務を行う部屋――専属秘書室の扉が勢いよく開かれる。そうして私たちの

隣室、秘書課の部屋に入ってきた人物は両手で顔を覆って、わあっと泣き崩れた。

……ああ、また。

私は頭を抱えなくなるのを堪えて、自分の仕事を中断した。

氷野須王の就任に伴い、当然専属秘書を誰にするのかという話が上がった。周囲はそのまま私がつけばいいと言ってきたが、のらりくらりとかわして今に至る。

社会人としてあるまじき行為だと自覚しながらも、感傷からくる個人的願望を優先させたのだ。

私以外の人が新CEOの秘書になることには、幸い、秘書課メンバーの後押しもあった。

なにせ新CEOは病院でナースが騒ぐほどの容貌である。当然うちの女子社員たちも大いに騒いでいた。

高身長でスタイルも抜群、そして冷静な態度。海外生活が長かったせいも、立ち居振る舞いが堂々としており落ち着いている。涼やかな眼差しひとつで空気をしんとさせるところさえ、クールでカッコいいと周囲に言わしめた。

そのうえ、独身だ。

女性たちが目の色を変えるのも無理はない。

だから『私も専属秘書の経験を積みたいです』とか『CEOのお役に立てるなら喜んで』といった立候補者がたくさんいた。

そうして最初に選ばれたのは、秘書課の中でも比較的職歴が長く、仕事ができて落ち着いている綺麗な女の子。

なのに——そんな彼女は二ヶ月前、『私には氷野さんのサポートは無理です!』と泣きながら部屋から飛び出してきたのだ。

残念なことに、それから同じような場面が続いている。

……いや、今回は少し長くもったかな?

私は泣いている彼女を他の人に頼み、専属秘書室に入ると、その隣にあるプレジデントルームへと続くドアの前に立った。

きりつと胃が痛くなる。かといって、秘書課の責任者としてはこの事態を放っておくわけにはいかない。

私は嫌々ながらドアをノックしてから入室した。

「なんの用だ。呼びもしないのに来るな」

パソコンに向かったまま、我が社のCEOに就任したばかりの氷野須王が言った。目が据わっていて見るからに不機嫌だ。なまじ顔立ちが整っているせいで、余計に凄みがある。

ひゆるるーと奴から冷気が漂うのを感じながらも、私は頑張つて彼の机の前に立った。

「今度はなにが原因ですか?」

「女が泣く原因に心当たりなんかない。俺は仕事を命じただけだ」

私は机の上に積み上げられた膨大な書類にちらりと目を向けた。おそらく短期間で、あれらの資料をまとめるなり、整理するなりを命じたのだろう。

「あれを一人で行うのは無理です」

「どうやれば遂行できるか考えるところからが仕事だ。給料を払っているんだから、それ相応の対価を求めて当然だろう?」

相変わらずパソコン画面を見たまま、彼は無表情で言い放つ。

「君こそ毎度毎度ご苦労なことだな。俺に文句をつける暇があるなら、君が代わりにあれをやればいい」

いきなり、すつと視線が私をとらえた。

人の心を切り裂くような鋭い視線に、背中に悪寒が走る。

……出た、出たよ、殺人ビーム。

蛇に睨まれたカエルのように固まりそうになる。

「関崎。俺は役に立たない人間はいらない。それに無駄口を叩く奴も。さっさと仕事に戻れ」

私は口をパクパクさせて、けれどなんの言葉も出てこなくて、すごすごとまわれ右をした。ついでに積み上げられた書類を手にして秘書課に戻る。

大量の書類を自分の机の上に置くと、まだ涙目の彼女が「関崎さん……すみません」と謝ってきた。

私は首を横に振り、それらの書類を手早く秘書課のメンバーに振り分ける。

書類の一番上に貼られていた付箋には、綺麗だけれど神経質そうな字で締め切り日が書かれていた。

『十日以内に』という指示があるからには、それまでにデータ化しろということだろう。

「CEOの要望に^応えるのは秘書の役割だけど、一人でこなさなくていいのよ。みんなで手分けしましょう。氷野さんだって、一人でやれって命じたわけじゃないだし」

秘書課のメンバーは誰もが一度は氷野須王に泣かされている。

敵が外部にできると身内には結束力が生まれるものだ。みんな渋々ながら私が振り分けた書類を受け取りにきてくれた。

「関崎さん、やっぱりこれ以上、専属秘書を務めるのは無理です。私、プレジデントルームの真横にあるあの部屋で、一人で待機できません」

……だよね。

私はなにも言えずに、ため息だけをついた。

* * *

「秘書課、撃沈だつて？」

同期で人事部に所属する武井^{たけい}礼香^{れいか}がサラダをつつきながら話を切り出してくる。

お昼休憩の今、私たちは会社近くにある六場の洋食屋に来ていた。社内に休憩スペースはあるが食堂はないため、こうして外へ出てランチをして情報交換をする。

いや、互いの愚痴^{ぐち}をこぼし合うのだ。

「うちだけじゃないでしょう？ どの部署もカウンターパンチくらっているって聞いたけど」

「そうなのよねえ」

——氷野須王は就任してすぐさま、様々な事柄を各部署に命じた。

経理にこれまでの経営収支報告を、人事には各自の業務成績の提出を、プロジェクト統括部にいたっては、今進行中のプロジェクトだけでなく過去のものまで報告するよう言ったらしい。

氷野須王が来始めた数日間こそ、女子社員たちは憧れの^{まなざ}眼差しで奴を見ていた。それはもう『え？ ここ会社だよね？』と言いたくなるほどの騒ぎで、女性というものはいくつになっても、たとえ恋人がいても「イイ男」には目がないのだと改めて教えられたものだ。

でも奴は一瞬で、そんな彼女たちの目を覚まさせた。

最初に秘書についた子には『役に立たない秘書はいらない。むしろ邪魔だ』と言い放ったのである。

華やかな受付嬢がモーションをかけた時も、『ここは会社だ。男漁^{おさ}りなら別でやれ』と冷淡に告げた。

それはそれはドスの効いた低い声で、ものすごく冷たい視線で、周囲が震え上がるほど威圧感を与えながら。

それらを目の当たりにした女子社員たちが、そそくさと逃げ出したの言うまでもない。

言い方が冷たい、優しくない。さらに仕事面では要求が高すぎて対応できない。できないと呆^{あき}れたような目で見られる。

我が社の新CEOは冷静、冷酷、冷淡……だと評判が立ち、今では彼の名前をもじって、社員の

間で『アイスキング』と呼ばれている。

「まあ、それでもわざわざうちの会社に来てくれた救世主だから、指示には従わざるを得ないんだけど」

礼香は肩をすくめて呟く。

——そうなのだ。

彼が日本の、それもうちのようなベンチャー企業に来たのは奇跡みたいなものだった。どうやら溝口さんと個人的な繋がりがあったようだ。

日本で仕事をする気があるなら我が社でとか、望み通りの待遇を用意するからぜひうちへといった引き合いが各所からあったと聞く。

要は、うちにはもつたいない人だということである。

私としては、熨斗をつけて差し出したい気分なのに。

「そうだけどもっと穏やかな言い方なりやり方なりをすればいいのに」

私はサラダのミニトマトに、ぐさっとフォークを突き刺した。ぐちゃっとつぶれて果肉が飛び出す。

「仕事もできるし能力もあるんだろうけど、人としてどうなの？　って感じ。会社のトップに立たんなら、データとか数字ばかり見ないで、人を見なさいよ！　社員を見なさいよ！　溝口さんが作り上げた会社なのよ！　ぐちゃぐちゃにしないでほしい！」

私がつぶれたミニトマトを口に放り込むと、パスタのお皿が運ばれてくる。

「凛は溝口フリークだもんねえ」

礼香は「おいしそう」と続けながら、ベーコンときのこのトマトソースパスタをフォークに巻き付けた。

——私にとって溝口さんは、我が社のCEOというだけではない特別な人だ。

私が溝口さんと知り合ったのは十歳の時。

その頃の彼は三十歳で、不動産会社勤務のサラリーマンだった。

我が家は昔からの家業を引き継ぎ、商店街で小さな呉服屋を経営している。

けれど、近隣に大きなショッピングモールが建設されたことで、昔ながらの商店街は人足が途

絶え、経営が悪化して廃業を余儀なくされる店が続出した。近所の顔見知りも引越していき、

シャッターが閉まったままの空き店舗が増えていく。その頃、商店街の代表を務めていた父は夜な

夜な話し合いに駆り出され、疲労にまみれていた。

みんなが途方に暮れていた中で、商店街を訪れたのが溝口さんだった。

土地を売ってマンションを建てればいいなどと言ってきた不動産屋が多かったから、父は最初、

大手不動産会社に勤めていた溝口さんも同類だと決めつけて怒鳴って追い出した。

けれど彼は、これまでの人たちとは異なる提案をしてきたのだ。

『商店街を蘇蘇らしましょう』と。

商店街の人たちは、思いもなかった提案と、彼のプレゼンテーションに、瞬またたく間に魅了された。陰鬱いんうつとしていた会合は、活発な議論の場となって、みんなが商店街の再開発に意欲を燃やすように

なつたのである。

父にも活力が戻った。

商店街の代表だった父と彼とは、会合の後、酒を酌み交わす仲に。そして私たちは家族ぐるみの付き合いを始めた。彼には奥さんと私より八歳下の息子がいて、商店街が生まれ変わって活気づくまでの数年間、交流が続いた。

私が高校生になると同時に、彼は『もっと支援活動の幅を広げたい』として独立し、起業したのが今の会社だ。

私にとって溝口さんは、生まれ育った商店街に笑顔を取り戻してくれた魔法使いのような人。

彼の手で救われていく町やお店を見ているうちに、私は彼への憧れを強くしていき、気がつけば淡い想いを抱いていた。

——私も誰かを笑顔にする仕事がしたい。

溝口さんのそばで、彼を支えながら、彼の夢と一緒に叶えていきたい。

大学生になると彼の会社に無理やりバイトとして押しかけ、将来はここで働きたいとワガママを言った。入社試験の面接の日の、溝口さんの仕方なさそうな笑みも優しい眼差しも覚えていた。

少しでも彼の力になりたくて、手助けしたくて頑張ってきた。

そして数年前に、ようやく秘書として直接彼を支えられる場所に来た。

溝口さんの専属秘書でいることが、彼のそばにいられる唯一の方法だったのに——

「それで……次は誰が生贓になるの？」

礼香に聞かれて、私は眉根を寄せた。

そうなのだ。今日の子が秘書課の最後の砦だった。けれど彼女も、脱落してしまった。つまり秘書課にはもう対応できる人材が残っていない。

「もう、いつそ礼香やってみない？」

そうだ。

この際、秘書課の人間でなくてもいい。あの男とやり合える人ならウェルカムだ。

礼香は口元をナフキンで拭くと、にっこりと綺麗に笑った。

「丁重にお断りいたします。どんなに顔がよくてスタイルがよくて頭がよくて仕事ができても無理ですから」

ことさら丁寧な口調で、息継ぎもせずに言い放つ。

「氷野さん狙いの女子社員とかいない？」

「就任当初ならともかくねえ、そんな強者なんているかなあ。超肉食女子とか？ いや、それはむしろ、氷野さんが嫌がりそう。あれは多分、女嫌いだもの」

……女嫌いだ。

礼香のコメントに心当たりがありすぎて、私は顔をしかめた。

「エレベーターで乗り合わせた時に挨拶しても、一瞥するだけで答ええないし。近づくと眉間に皺を寄せているし。まだ、男性社員のほうが彼とスムーズにコミュニケーションを取れている気がするのよね」

「やっぱり、礼香もそう思う？ そんな私的な感情を仕事に持ち込まないでほしいんだけど」
私はフォークをぐるりぐるりまわして、アスパラと生ハムのクリームパスタをすくい上げた。

——礼香の言う通り、氷野須王は相当な女嫌いだと思う。その証拠に、奴は着任直後、お茶出しをした秘書を追い出して『自分でやるから部屋に準備してくれ』と言った。だから私が、あの部屋にティーセットやコーヒーメーカーを設置した。

スケジュールを確認しに行けば『自分で確認するから必要ない』とバツサリ。

資料を届けに行けば『重要度別にボックスに入れておけ。俺の都合がいい時にチェックする。終わったものはこちらへ置いておく』とのたまった。

ことごとく秘書を排除しようとしているのが見て取れた。

「『最終兵器』を投入するしかないかな」

「『最終兵器』ってなによ！」

呟きに反応した礼香に、私は悪人顔でふふふと笑みをもらす。

「凛、顔が気持ち悪い」と言われたけれど構わない。

そう、もうこの際、秘書課の人間でなくてもいい。

私が持つ、とっておきの権限を使つて采配さいはいさせていただきましよう！

* * *

秘書課で働く者たちは、会社の経営を担たかう上司を支えていくんだ！ という気持ちが強い。

少しでも役に立ちたい、必要とされたい、そんな想いが生まれる。

専属秘書なんかになれば尚更だ。

だから秘書課の女の子たちはみんな、なんとか『アイスキング』の役に立とうと張り切つて、多すぎる業務を一人で抱え込んで、耐えられなくなつた。

これまでの奴の仕事のやり方を見ていると、『自分の役に立ち、ほしい情報を得られ、自分の言う通りに動く者なら誰でもいい』といったスタンスである。

さらに命じてくる仕事量も多い。

専属秘書一人でこなせるものではないのだ。

だったら、専属秘書はいつそ伝達役に徹して、秘書課全員で仕事をしたほうがいい。

秘書の仕事などにも知らないほうが、むしろ伝達役には徹しやすいに違いない。つまり私は、秘書課以外から適任者を選出しようと考えたのである。

その仮説を周囲に力説し、なんとか同意を得た。そして『最終兵器』を投入して数週間——

「あの！ 取引先へ手土産てみやげを用意するように言われました。それから、この年度のデータをそろえてまとめてほしいそうです。あと、この書類の準備も頼まれました！」

専属秘書室から飛び出してきた彼女の名前は大川ひまり、通称『ひだまりちゃん』と呼ばれている、我が社の元受付嬢だ。

そう、彼女こそが私の『最終兵器』、社内随一の癒いよし系女子である。

——実は私には特技がある。

父が商店街の代表をしていた関係で、小さい頃から我が家にはいろんな大人が出入りしていた。たくさん大人の大人を見ていると、人の相性や力関係がだんだんわかってきて、『この人とこの人が一緒にやればうまくいきそうだな』とか『この人とこの人はダメだけど、こっちの人を入れたらバランスがいいかも』とか閃くようになっていったのだ。

学校生活でも、そういった自分の勘がどこまで通用するか常に試していた。

学校ではグループ活動が多い。グループ間でトラブルが起きると、私はさり気なく人を誘導してそれらを解決したり、活動性の高まるグループ編成を提案したりした。

この会社に入社してからの数年間は、仕事を覚えるのに精いっぱいだったけれど、慣れてくると人間観察ができるようになる。

私は、溝口さんに社内の情報をスムーズに伝えるために、社内の人間関係から業務内容まですべてを把握するように努めた。

そこで気づいたことを彼に伝えていつているうちに、人事関係のオブザーバーを任されるようになったのだ。

当時の人事部長は、私の提案に胡散臭うさんくさそうな目を向けていたけれど、いつもトラブルを抱えている部署が円滑にまわるようになっていたり、思いもしない能力を発揮する社員が出始めたりしたことで、少しずつ認めてくれた。

溝口さんの専属秘書については、新入社員の配属先を決める場にも同席していた。彼が退任

した今、私はその場でメインに動いている。

氷野須王の専属秘書を決める際も、私は任命権を与えられていた。就任前に彼と話す機会はないだったので、彼の経歴や雑誌などの記事から得られた情報を考慮して最良と思える人選をしたつもりである。

だが、選んだ社員がことごとく部屋から泣きながら飛び出してくる有様だ。

……まさか秘書課が全滅するとは思わなかったんだよね。

そうして最終手段で見つけたのが彼女、大川ひまりだ。

ひだまりのような温もりを感じるよな、と誰かが言ったことから、『ひだまりちゃん』と命名された彼女。

ふんわりした髪も、小柄な体形も、優しく穏やかな性格を表すような顔立ちも、とてもかわいらしい。

彼女を受付から離れたことで、社内だけでなく社外からも嘆きの声が聞こえたけれど、背に腹は替えられない。

最近では、異動先がCEO専属秘書室だと知った者たちから、『アイスキング』の氷を溶かすのは『ひだまりちゃん』だけだ！と期待もされている、はずだ。

ひだまりちゃんは、専属秘書を打診した当初『私にはなんの資格も経験ありません！お役に立てるかどうかわからないし、自信もないです』と、不安そうだった。

私は『氷野さんが求めているのは、自分の仕事のサポートをする人材なの。でも専属秘書一人で

対応できることじゃないから秘書課全員で取り組みたい。氷野さんの要望を私たちに伝える伝達役になってほしい』とお願いした。

伝書鳩でんしほとのような仕事ならやりたくないと言発を受ける覚悟もしていたけれど、お通夜のように沈んだ秘書課の雰囲気と同情してくれたのか、彼女は『わかりました。言われたことは忠実にやるように頑張ります』と引き受けてくれた。

——こうして、ひだまりちゃんが氷野須王の専属秘書になったのが数週間前。

私は今日も彼女からの伝達事項に、手の空あいている秘書の子を探して仕事を振り分ける。そして大川さんには取引先の確認をして、手土産てみやげ一覧の資料を見せた。

大川さんの今のメイン業務は伝達係だが、少しづつ秘書としての仕事を覚えていけばいい。

いずれ彼女も自分でできる仕事は自分でこなし、対応できない時は他の人に手伝ってもらおうという方法を取れるようになるはずだ。

私は氷野須王のスケジュールをタブレット端末で確認して、他にも手土産てみやげの用意を依頼される可能性がないかチェックした。

「いつも関崎さんに頼りっぱなしですみません。本当はこういったことを自分でできるようにならないといけないですよね……」

しゅんとした様子で、大川さんが呟いた。

ああ、太陽に雲がかかっちゃったよ。

『ひだまりちゃん』はいつもぼかぼか、にこにこ笑顔が似合っているのに。奴の冷気にあてられて

凍っていた私たちを暖めてくれたのは、あなたなんだよー！

「大川さんは一生懸命頑張っているし、私たちは助かっている。仕事はゆっくり覚えればいから、ね」

——私関わっていた新入社員の配属決めめの目処めどが立ったので、自分の業務にも余裕ができた。

そのため社内で再度、彼の専属秘書には私がつけばいい、という声が出ているようだけれど聞き流している。

自分勝手なのは承知しているが、できれば、このまま大川さんに継続してもらいたい。

彼女は氷野須王に意見もしなければ口答えもしない。あくまでも伝達係に徹して仕事をしている。だから彼は怒鳴ることもなく、『役に立たない』と追い出すこともなくなつて、ようやく秘書課も落ち着き始めたのだ。

秘書課のメンバーも、大川さんのサポートを快く引き受けてくれている。おかげでうまくまわっていると思う。

だから、これでいい。

でも——

私は奴のスケジュールを見て、眉をひそめた。当然ながらスケジュール管理は本人がしている。彼は仕事ができるし、処理スピードも速い。能力があるからこそ、効率よく仕事を組み込んでいるんだろうけれど、それでもこのスケジュールはきつきつで、余裕がないように見える。

CEOとして就任した気負いからか、急激に社内の変革に取り組んでいるためにそうなってしまうているのかもしれないけれど。

もし私が専属秘書としてついていけば、嫌がられるとわかっただけでも苦言を呈するだろう。車で移動する間に食事をとったり、仮眠の時間を確保したり、少しでも休養がとれるような提案もする。……なんて、思い切り私情から、その役を降りておいて勝手すぎるけれど。

大川さんは『氷野さんは忙しそうですね』と言うけれど、特に気にはしていないようだ。

そこはきつと配慮が足りない部分かもしれないが、少し前までまったく違う課にいたのだから仕方ないこともある。

……大川さんにそれとなく進言する？ まあ、でも大川さんがそんなことを言ったら奴は嫌がりそう。きつと『余計なお世話だ』と冷たく突き放すに違いない。

「……さん？ 関崎さん？」

大川さんの呼びかけに、私ははつとする。

「あ、ごめんね。えーと、日持ちのする手土産をいくつか準備しておきましょうか？ もしかしたら他にも、氷野さんから依頼があるかもしれないから」

「はい。わかりました」

大川さんはメモを取りながら、真剣に資料を見てスケジュールと照らし合わせている。

——『アイスキング』は私の配慮なんか必要としてない。
だから、せめて彼女がそばにいて、癒やされればいい。

過密なスケジュールを見ながら、ほんの少しだけそう思った。

* * *

取引先との会議を終えて部屋に戻ると、俺——氷野須王はその部屋の有様ありさまにふつと息を吐いた。プレジデントルームの前の住人である溝口さんの趣味か、この部屋はシンプルでモダンだ。

ウォールナットの机や書棚をはじめ、全体的に木の温もりを感じさせる家具で統一されている。綺麗きれいに整理整頓せいとんされていけば、センスのいい設えしえだ。

なのに、今はその面影もなく雑多に散らかっていた。

つい数週間前までならば、専属秘書が俺の留守の間に気を利かせて片づけていただろう。

でも今回、俺についた秘書はかなり配慮に欠けているようだ。

元受付嬢で秘書経験など皆無みなだと聞いていたし、質問も言い訳も一切せずに、言われたことをこなしている分、今までよりも扱いやすいとは思っていた。

けれど、この部屋の状態を見ても放置し続けるなんて、かなり神経が図太いのもかもしれない。

ため息をつきながらスーツの上着を脱いでハンガーにかけると、机の上にそろえられた資料に気づいた。

「大川」

前室で待機しているはずの秘書を呼ぶと「はいっ」と上ずった声がして、おずおずといった風情ふぜい

で大川ひまりが姿を現した。

「この間頼んだ資料、もうデータ化できたのか？」

かなり大量の資料を、大川の机の上に置いていたはずだ。

締め切りは十日以内にしていたのに、三日と経たずに仕上がっている。

「あ、まだすべてそろったわけではありません。優先順位の高いものから取り組んで、できあがったものをそちらに置いています。パソコンにもデータを転送しています」

資料を手にしてざっと目を通したところ、彼女の言う通り確かにすべてがそろっているわけではなさそうだ。

だが、締め切り日を伝えただけで、優先順位など決めていなかった。

「俺は優先順位なんて指示していなかったはずだが」

「関崎さんが判断してくださいました」

大川は悪びれもせず、にっこり笑って告げる。

「……また、関崎か」

「はいっ！ 氷野さんに依頼されたものは、すべて関崎さんの判断を仰いでいます。私一人では到底できませんし、関崎さんはものすごく優秀ですから！」

秘書課の他のメンバーに仕事を割り振っているのも関崎さんです！ と彼女は張り切って続ける。大川ひまりには専属秘書としてのプライドなど微塵もないのか、そう素直に言ってくる。

これまでの秘書たちは、自分ですべてを抱え込んで、できなかった、難しかったと弁解して泣き

出し、この部屋を飛び出していった。

そのたびに、理由を尋ねにきていた彼女を思い出す。

溝口さんの元専属秘書であり、秘書課の中心人物。

俺は大川が用意した書類を置き、その隣にあった新入社員の配属先についての資料を手にした。

人事部長が主体となっているはずだが、責任者の欄には「関崎凛」の名前も入っている。

資料に名前がない場合もあったが、どの部署のどの案件においても彼女の存在は感じてきた。

裏で会社の采配をふっているのは彼女に違いない。

なんとなく確信を持ち、嫌な気分になる。

これだけ秘書が途中交代しても、関崎凛自身が俺の秘書にっこうとする気配はない。

秘書課が全滅して、元受付嬢まであてがってきたのだ。

どこことなく挑戦的なものを感じて不快になる。

——肩までの真つ直ぐな髪にノンフレイムのメガネで、華やかさの欠片もない女。真面目さだけが取り柄のような彼女の雰囲気は思い出せても、顔立ちまでは浮かばなかった。

「あの……」

「なんだ」

いちいち、びくつと怯えるなど言いたいけれど、ふんわりとしたやわらかな外見をしている大川は、それを躊躇わせる。

綿菓子みたいな噛み応えのなさが、なんとなく俺に苦手意識を抱かせる。

「関崎さんを、秘書になさろうとは思わないんですか？」

「どうやらこの綿菓子娘も、関崎凛を慕っているようだ。」

俺は緩く腕を組み、彼女に向き合った。

「仕事さえしてくれるなら、秘書だろうが元受付嬢だろうが構わない。どうやら大半の仕事を彼女がこなしているようだが、君を伝達役に置くぐらいだ。俺の秘書をする気なんかないだろうか？」

「関崎さんは、新入社員の研修を担当してお忙しいからだと思います！ 最近はそれも落ち着いたので、きつとお願ひすれば」

俺は、じろりと綿菓子娘を睨んだ。

彼女がびくっとして口を噤む。

「俺がお願ひするのか？」

「あの……いえ、言葉を間違えました。申し訳ありません……」

直接関わってはいないのに、俺のまわりには常に関崎凛の存在がちらついている。

それでいて本人は、俺に直接対峙してきたりはしない。

そんな胡散臭い女を、そばに置く気になるわけがない。

「もういい。仕事に戻れ」

彼女はすんなりまわれ右をした、と思つたら、ふたたび俺に向き直つた。

「あの……」

「まだなにかあるのか？」

「関崎さんが……このお部屋の掃除の許可を得たほうがいいと……あの、片づけてもよろしいですか？」

彼女がちらりと部屋全体を見ました。

関崎が指摘しなければ、自分から言い出すことなどなかった様子がありありと感じられる。俺はため息をついて「俺の留守の間に片づけておいてくれ」と答えた。

* * *

なにをしても、うまくいかない日というのがある。

最初のケチは家を出る間にストッキングの伝線に気づいたことだった。それで、いつもより遅めの電車に乗る羽目になり、さらにその電車がトラブルで遅延した。

慌てて秘書課に飛び込んだ途端、課の人たちが待ってましたとばかりに駆け寄ってくる。

「関崎さん！」

「メールもして電話もしたんですけど、気づきませんでしたか？」

「大変なんです！」

それぞれに矢継ぎ早に話されて、思わず後退する。

「みんな、落ち着いて！ どうしたの？」

「大川さんがお休みなんです！」

「風邪をひいたみたいで、連絡がありました」

「どうでしょう！」

私が最初に思ったのは『ああ、ひだまりちゃん風邪ひいちゃったんだ。大丈夫かな？』だった。その後、みんなの慌てぶりに、つまり彼女がお休みしたということは、専属秘書がいらないということだと気づく。

私の表情の変化を、彼女たちも敏感に察知しようだ。

「私、今日は他の役員の方のお手伝いがあります！」

「私も早急に処理しなければならぬ仕事があります」

「私は……私には無理です！ すみません」

彼女たちに縋るように見つめられて、私はなにも言えなくなつた。

新入社員の研修も終わり、彼らの配属先も決まったので、私には余裕がある。

「……今日は私が氷野さんにつきまます。大川さんが明日以降もお休みするようなら、また検討します」

「ありがとうございます！」

彼女たちは声をそろえて頭を下げると、ほっとしたようにほほ笑んだ。

秘書課の人間の反応としてはどうかとは思うけれど、三人とも奴に泣かされてきたのだ。気持ちにはわからないでもない。

慣れない秘書業務に、気の休まる時間などなかった大川さんが体調を崩すのも仕方がない。

私は自分の机に向かい、まずスマホをチェックした。

彼女たちの慌てぶりが窺える着信履歴やメールの内容に苦笑する。

それから、彼のスケジュールを確かめる。

今日は、午前中は社に居るが午後からは外出する。ついでに明日の予定も見ると、相変わらずの詰め込み具合だ。

私はとりあえず、プレジデントルームに向かった。

まだ彼は来ていないようだったので、まずカーテンと窓を開けて空気を入れ替えた。

この間この部屋に資料を置きにきた時は、その散らかりぶりに驚いた。それについて大川さんに聞いたところ『最初に、余計なことはすると言われたので、お部屋の掃除はしていません』とあっさり答えられた。

あの有様を放置できる大川さんにも驚いたけれど、あれだけ散らかしても指示しない彼にも呆れた。

今は、さすがに彼女の手が入ったのか、雑多な感じではあるものの散らかってはいない。

——プレジデントルームの家具は、溝口さんのお気に入りものばかりだ。そしてこれらの家具は、今もそのまま使われている。

主が変わったことで起きた部屋の変化と、そんな中わずかに感じられる溝口さんの名残に、私はちよっとだけ複雑な気分になった。

氷野須王が余計なことをされると嫌がるタイプであることはわかっている。

でも、私が専属秘書だった頃、プレジデントルームを整えるのは朝一番の私の仕事だった。机の上やセンターテーブル、書棚を雑巾で拭く。

ファイルを整え、各社の新聞や雑誌を並べ、観葉植物に水をやり、ゴミ箱は空にする。

その後は給湯室で、コーヒーマシンの準備を行う。

上司が不快になるようなことは、すべきじゃないとわかっている。

そう思いながらも、あえて私は溝口さんの時と同じように部屋を整えた。

——文具を置く位置が違う。部屋に残る香りが違う。溝口さんがこの部屋に戻ってくることはない。

『おはよう、関崎さん。今日も一日頑張ろうね』

そう声をかけられることもない。我知らず、涙が込み上げる。

「ここで、なにをしている？」

突然声をかけられて、私はびくっとして振り返った。

ぼやけた視界に慌てて瞬きをして、咄嗟に頭を下げた。

……ルーティンをこなしているうちに感傷に浸りすぎた！

「おはようございます。今日は大川が病欠ですので、私が隣室に控えます。御用がありましたらいつでもお申し付けください」

無作法だけれど言い逃げようと、そのまま彼の横を通りかかった。途端に腕を掴まれる。

「この部屋を整えたのは君か？」

低く凄みさえ感じる声に、ぞわっと背中に寒気がする。

……やっぱり余計なことするんじゃないかった！！

「申し訳ありませんでした！」

反射的に謝罪する。私は頭を下げたまま『余計なことはするな』と言われるのを覚悟した。

けれど予想に反して彼は無言だった。ついでに私の腕も掴んだままだ。

彼の手に力が込められているわけじゃないけれど、振り払うことはできないし、やんわりどけることもできない。

恐る恐る頭を上げると、彼は大きな窓の外をぼんやり見ている。

この部屋はオフィスビルの上階に位置するうえに、他のビルに視界を遮られることもないため、外の景色が見渡せる。

溝口さんは、いつも都会の街並みと空を眺めて、『今日はいいい天気だ』とか『雨が降りそうだね』などと呟いていた。

今、外を眺めている氷野須王の横顔は、どこことなく和らいで見えた。

……こんな表情もするんだ。

きっと彼は、この窓から見える景色を初めて見たのだと思う。

この窓だけはブラインドではなくカーテンをひいてある。

厚手のカーテンは開けても、レースのカーテンまでは開けなかったに違いない。

するりと腕が離されると同時に「昨日頼んでいたものはできてるか？」と聞かれる。

私は我に返り、「すぐに確認します！」と答えてその場を去った。

彼に資料を渡し終え、CEO専属秘書室の席につく。

久しぶりにCEO専属秘書室に来たせいで、私はそわそわと落ち着かなかった。

この場所に私がいいた形跡などほとんどない。引き継ぎのために準備したファイルが一番上の引き出しに入っていることが唯一の名残ともいえる。

机の上のリンゴの形の付箋が、ひだまりちゃんらしくてかわいい。

まず初めに私は、彼のスケジュールを再度確認する。

数日先までびっしり埋まっている内容に、もう少しなんとかならないものかと思案する。スケジュールはいまだに彼が自分で管理していて、わずかな隙間にも仕事を入れているようだ。

彼から指示がない限り勝手なことではできないので、私は頭の中だけでこっそりスケジュールを組み直した。いくつかの業務の時間帯をずらして調整し直せば、空き時間が作れそうだ。うまくすれば休日も確実に休みを取ることができる。

けれど、彼がそれを望むかはわからない。

スケジュール確認を終えた後は、各プロジェクトの進行状況をまとめ直す。

——溝口さんも精力的に仕事をこなす人だった。それぞれのプロジェクトからは随時報告がなされていたけれど、忙しい彼が短時間で進捗を把握できるように、私はそれを見やすく一覧表にしていた。進行状況に遅れはないか、懸念材料はないかなどをチェックしたり、すでに終了したプロジ

エクトのアフターについても知らせたりしていた。

身に着いたルーティンとは恐ろしいもので、誰に提出するでもないのに、私は今でもそれらの作業を続けている。

今日の分もまとめ終えたところで、バタバタと扉の外が騒がしくなった。そうかと思えば、ノックと同時にドアが開けられる。

「氷野さんは？」

プロジェクト統括部長が顔を真っ青にして私に問うた。

その直後、私の表情で彼が部屋にいることはわかったらしく、私の答えなど待たずに慌ただしくドアを叩いた。そして、中からの返事を聞いてすぐに飛び込んでいく。

私は椅子から立ち上がり、ドアのそばに近づいた。

よほど慌てていて閉め忘れたのか、隙間が数センチ開いていて、二人の緊迫した声が聞こえてくる。

あんな統括部長の表情を見たのは、溝口さんの退任が決まった時以来だ。なんらかの問題が起こつたに違いない。

「どうしてそんなことになった！」

「申し訳ありません。すべて私の確認不足です！」

氷野須王はそれ以上、声を荒らげたりはしなかった。

多分、怒鳴るよりも先にしなければいけないことがあると思っただろう。

感情を押し殺した低い声で「先方には直接俺が行く」と言った後「関崎！」と呼ばれた。

私は「はい！」と返事をする、反射的にドアから離れて、盗み聞きがバレないようにする。

「すぐに飛行機の手配を！ それから今日以降のスケジュールをすべて調整してくれ」

行き先、人数、宿泊先の手配を矢継ぎ早に命じられる。

私は、行き先からのプロジェクトでトラブルがあったのかすぐに気がついた。

地方の寂れた温泉旅館街の再生プロジェクトだ。

建物の老朽化に伴う観光客の減少、オーナーの高齢化に後継者不足。リフォームしようにも銀行からの融資がなかなかおろさず、いくつかの旅館が廃業に追い込まれている。

地域の再開発事業と併せて行うことで、官民一体のプロジェクトになる予定だった。

資金面では助かるけれど、行政に提出すべき書類や許可を得なければならぬことが多く、手間は格段に増える。

担当チームは行政書士と連携して慎重に進めていたはずだが、そこでもトラブルが起こったようだ。

「私もすぐに同行の準備をいたします！」

統括部長はそう言うと、来た時と同じぐらい素早く部屋を出ていった。

私も秘書課の他のメンバーに、すぐに飛行機の手配をするよう内線で伝えた。同時にさっきまで作っていた、各プロジェクトの資料も印刷する。

「今日以降のスケジュールに関して優先順位はありますか？」

「いや。先方に合わせてもらって構わない」

「失礼ですが、出張の準備はご自分でなさいますか？」

「自宅に戻るような余裕はないだろう。必要なものは現地で調達する。それよりこのプロジェクトに関する資料はどこにある？」

ひだまりちゃんが引き継ぎ書通りにファイルの片づけをしてくれていれば、キャビネットの右側にまとめて置いてあるはずだ。

予想通り片づけてくれたようで、私はすぐにそのファイルを見つけて彼に差し出した。

それから印刷し終わったばかりの、私が作った資料も彼の手に渡す。

余計なお世話かもしれない。でも、これを使うも使わないも彼次第だ。

彼は訝しげに渡したのを見ていたけれど、すっと視線を上げて私を見た。

「これは？」

「差し出がましいとは思いましたが、私がまとめたものです」

「……いつ作った？」

「各プロジェクトについては毎日更新しています。溝口さんには出勤されると同時に提出していました」

「……君は——」

彼はなにか言いたげな表情をしていたけれど、それ以上言葉を発しなかった。

私はドキドキしながら、今度は専属秘書室のロッカーからスーツケースを取り出す。

機内持ち込み可能なサイズの小さなスーツケースの中には、新しいシャツやネクタイ、男性用の下着や靴下、洗面道具に髭剃りまで一通り入っている。

サイズは溝口さんに合わせたものだけれど、大丈夫なはずだ。

「中身はすべて新品です。氷野さんの好みとはいきませんが、誰もが使えるようにベーシックなものを選んでいきます。もしよろしければお使いください」

仕事にトラブルはつきものだ。だから急な出張に対応できるように常に準備していた。

「氷野さんの好みを教えていただければ、次回からはそれを準備します」

彼は呆気に取られたように私を見た後、大きくため息をついた。それから無言でスーツケースの中身を確認していく。

「そうだな。次からは俺が指定する」

余計なお世話だと言われなかったことに、ほっとする。

「君は——どうしてそこまで俺につくのを嫌がる？ 役に立たない秘書を送り込んだ挙句、未経験の元受付嬢をあてがってくるぐらいだ。俺のCEO就任を快く思っていないのはわかっていただけれど、ここまで嫌がられる理由がわからない」

「え？」

私は冷や汗がたらたらと流れるのを感じた。

『余計なお世話だ』と怒鳴られないだろうかとハラハラしていたはずなのに、今は別の意味でハラハラする。

——確かに私は彼の専属秘書につきたくはなかった。

溝口さんを尊敬して、追いかけて入社した身として、彼以外がトップに立つ姿を、間近で見たくないと思っていたのは事実だ。だからと言って、困らせようとは思っていなかった。

……え？ 他の秘書をつけたのを、嫌がらせだと思われているの？

ひだまりちゃんを抜擢したのは、癒しになればと思ったからで。

私はぶんぶんと首を横に振った。

……いや、いや、いや。

「私にそのような意図はありません。秘書課の他の子たちも仕事ができないわけではありませんし、専属秘書の経験もしてほしかっただけです。後任を育てるつもりでした。大川だって経験はありますが一生懸命取り組んでいます」

そうだよ！ なんだか私が意地悪したみたいな話になってるけど、あんたが気に入らなくて数々の秘書を追い出したから、ひだまりちゃんになったんじゃない！ と心の中で突っ込んだ。

「一生懸命、ね。他人に仕事をまわすのは上手だし、すべては君がやったと正直に伝えてくる素直さは評価できるが」

ひだまりちゃん……私は思わず遠くを見つめた。

どうして素直にそんなことを言うんだろう。自分の手柄にしたって構わないのに、そういうずるさがないところが、かわいいんだけど。

「じゃあ君に俺への個人的な感情はないということだな」

「は……い？」

個人的な感情ってなに!? と思いつつ、とりあえず肯定した。それからついでに、ほほ笑んでみせる。

その時、プルルツと内線が鳴って、私はすぐさま受話器を手にする。妙な空気を変えてくれた内線に大感謝だ。

電話を終えた私は、ビジネスモードな口調で彼に話しかける。

「飛行機の手配が完了しました。下に車をまわしますので、どうぞご準備されてください」

「とりあえず今後のスケジュールの調整は任せる。あとは追って指示をする」

「かしこまりました」

私は最後まで気を抜かないようにしながら、部屋を後にした。

* * *

あのあと、私はすぐに午後からの彼の予定をキャンセルし、別の日程に組み直した。

幸い、それほど重要度の高いものはなかったので、スムーズにできた。

今後のスケジュール調整は任せるという言質を彼から取ったので、私の思うように組み直すことができた。無駄なく効率よく、その上、休養時間も確保したのだ。

ついでに、急な予定変更のお詫びの品を送る手配もする。

留守中のプロジェクトの進行にも気を配る必要があるだろう。今回はなにせプロジェクト統括部長も同行したし。

私は久しぶりの秘書らしい業務を楽しんでいた。たとえ溝口さんの下で働けなくとも、私はこの仕事が好きだ。

トラブルが無事収束することを願いながらも、鬼のいぬ間になんとやらという具合に、せっせと仕事をこなした。

「——で、なんとかなかったわけ？」

数日後の昼休み。カウンター席に横並びで座って、私と礼香は蕎麦をすすっていた。

梅雨入り間近なせいか湿度が高い日々が続いている。

くもりかと思えば晴れ間がさし、雨が降りそうな黒い雲が空を覆っていても、降ってこない。

季節もお天気も曖昧で、こんな時はあつさりしたものが食べたくなる。

「うん。統括部長からプロジェクトチームの担当者に連絡があつたみたい。今日の午前中の飛行機を手配したから、お昼過ぎには戻ってくるんじゃないかな」

「——で、どうするの？」

「なにが？」

私がお蕎麦にちょんちょんつとわさびをつけてから、つゆに浸した。わさびのさわやかな風味が広がって、その後少しだけつーんとくる。蕎麦の甘みが増しておいしい！

「専属秘書……もうやらないわけ？　ここ数日楽しんでたじゃない」

大川さんは翌日には出勤してきた。

私は休んでいた分の引き継ぎと同時に、様々な業務と一緒にこなしながら、ついでに指導もした。私が秘書経験で培ってきた裏技的なものも教えた。

「大川さんも頑張っているからね。氷野さんからのクレームもないし、このままやってもらうつもり」

私がやれば、いつかは彼とぶつかりそうな気がするのだ。

それで互いに嫌な気分になるよりは、これまで通りのやり方ではないかと思う。

「氷野さんへの認識、改めたんじゃないか？」

礼香の言葉に、私は彼の留守中のことを思い出す。

彼の仕事を間近で見て、頑なになっていった自分の態度を反省したのは事実である。

——彼は私たち秘書課に、すべてのことをデータ化するよう命じてきた。数字に強いか、そこからの分析力に定評があると耳にしてはいたけれど、正直私は不快だったのだ。

溝口さんは人を大事にして会社を育ててきた人だった。

そこにいる人たちの繋がりを重要視したし、社員が互いに成長し合えるようなチーム作りに尽力した。

それぞれが所属する部署はあるものの、プロジェクトの内容に応じて部署を越えてメンバーを選

定する。得意分野、人間関係、個々の能力、総合的に判断したチーム作りをして業績を伸ばしてきたのだ。

だから、数字ではなく人を見てほしい、そう思っていた。

でも、今回のトラブルをきっかけに彼の采配を間近で見て、悪いことばかりじゃないと気がついて——

時間単位で業務を区切らせることで、社員たちは集中して取り組むようになっていた。

データで客観的な数字が提示されたおかげで、曖昧な感覚で仕事を進めなくなった。

今までとは違う人間関係が築かれていた。

まだやり方に慣れていなくて、戸惑っているチームもあったけれど、若手を中心に柔軟に対応し始めている。

私があるこれ考えていると、礼香がさらに会話を続ける。

「私もね、人事の評価を数値化するなんて面倒な作業だなあと思っていたし、数字だけでなにがわかるんだ、って思っていたけど、意外に当たっていたのよね」

トップが変われば会社が変わるのは当然だ。そしてそれが成果を見せ始めている。

会社の業績に結びつくまでにはもう少し時間が必要だろうけれど、社内の雰囲気は急速に変化した。

「うん、経理の子も言っていた。あの人、光熱費削減のための数値目標まで出させたみたいね」

「経費の扱いも厳しくなったらしいし」

私たちは笑えるけど、部長クラスの人たちは戦々恐々としていた。

「あ、礼香、蕎麦湯お願いする？」

「うん。お願い」

そんな会話をしながらも、また彼のことを考えてしまう。

——『俺への個人的な感情はないということだな』——

そう言われた時、本当はドキツとした。

個人的感情なんかあまりくだ。

彼への評価を修正するたびに、私は溝口さんが作り上げた世界が失われていくのを感じている。

幼い頃からの初恋は、こういう時、厄介だ。

彼が作り上げた会社を存続させていくためには、冷酷だろうがやり方が違おうが優秀なトップが必要で、私もそのサポートをしていくべきだ。頭ではわかっている。

そう、わかっている。

これまでの経験もあるのだから、新CEOの専属秘書にも、私が一番の適任者だ。

その次が、ひだまりちゃん。

けれど、私はもう少し、溝口さんとの思い出を大事にしていたい。

十歳で初めて出会った時から憧れていた人。

二十歳も年上の男性に抱く思慕が、恋愛感情だと気づいたのは高校生の時だった。

出会った時から溝口さんは結婚していて、子どももいて、到底叶うはずのない恋。それなのに、

私はその気持ちを葬ることができなかった。

せめて彼のそばにいて、手助けをして、仕事のサポートをする役目を担いたいと考え、仕事にあたってきたのだ。

私にとって専属秘書という立場は、邪なものを含んでいる。

——溝口さんが会社を去った今を、ひとつの区切りにしなければならぬだろう。でも、まだしばらくは、彼の幻影に縋りついていたい。

そう考えながら蕎麦湯をすすり、私は午後の仕事に向かった。

* * *

アイスキングが戻ってくると、社内の空気がびしっと緊張する。

いまだに緊張を与え続けられる彼をすごいと思えばいいのか、慣れない社員に呆れればいいのか微妙なところだ。かくいう私も、やっぱり顔が強張る。重い気分でプレジデントルームの部屋をノックしていた。

「関崎です。お呼びと伺いました」

「入れ」

ひだまりちゃんに『氷野さんがお呼びです』と言われる前から呼び出されるかもしれないと思っ
てはいた。できれば予想がはずれてほしかったのに、残念だ。

「スーツケースは助かった。活用させてもらった」

「お役に立てたならよかったです。片づけは私どもでいたしますので、そのまましておいてください」

「ああ」

出張帰りの彼は、どこことなく疲れているように見えた。

就任してから初めての大きなトラブルだったし、厳しい交渉だったはずだから当然だけど。

「明日からの俺のスケジュールを組み直したのは君か？」

「大川さんに指導しながら一緒に行了ました」

予想通りのことを聞かれて、私は準備していた答えを述べる。

けれど、彼にはご満足いただけなかったようで、ものすごくあからさまに顔をしかめられた。

「……土日に予定がないのは久しぶりだ。急な予定変更で厳しいスケジュールになるはずだったのに、君が配慮したんだろう」

休みが確保できて嬉しいと素直に喜べばいいのに、余計なことをしやがつてと言いたそうだ。

「差し出がましいとは思いましたが、氷野さんはスケジュールを詰め込み過ぎです。仕事なので必要であることはわかりますが、きちんと休養も取ってください。会社のトップが倒れば、会社も危なくなるんです」

それは溝口さんの入院で嫌というほど思い知った。なにせ、一時的に銀行からの融資が打ち切られそうな事態にまで陥ったのだ。新CEOが誰か知れるや、それはなくなっただけだ。

「俺は命じたことをやってくれるなら誰が秘書でもいいと思ってる。もちろん、一番役に立つ者がいい。たとえそれが、俺のことを必要以上に避けようとしている奴だったとしてもだ」

なんとなく話がすり替えられた気がして、私は笑みを浮かべながらも、頭の中は疑問だらけだった。

「とにかく。俺は君のように、いろいろ考えて動くのは性に合わない。スケジュール管理は他の者にしてもらったほうが楽だ。だから今後は君に一任する。それから、これらの資料を早急にまとめなおしてくれ。そして——」

「ちよつと待つてください！ 指示は専属秘書の大川にお伝えください。スケジュール管理も本来なら彼女の仕事です」

なんか、話の流れがおかしくなったと思い、私は待ったをかけた。

「言っただけだ。俺は仕事ができるなら誰がやってもいいと。役に立つとわかっている人間に任せるのが一番だ。大川には彼女にできる仕事を命じている。君には君のできる仕事を命じる。専属だろうがなかるうが関係ない」

私は呆気にとられながらも、異を唱えられなかった。まったくもってその通りだから。

私がなにも言わないのいいことに、奴はつらつらと仕事の指示を出していく。

私は反射的にメモを取りながら、なんとか反論材料を探してみたものの、見つけれずにごすこと秘書課に戻る羽目になった。

……余計なことした？ もしかして自分で自分の首を絞めちゃった？
思い悩みつつ、数時間前、彼に言いつけられた仕事の手は止めない。

量が膨大すぎるので、ある程度は秘書課の他のメンバーに振り分けた。それから大川さんにも仕事を分担しながら、指導していくつもりだった。特に奴のスケジュール管理とか！ 専属秘書の重要な業務だ。

けれど、彼女は彼女でいろいろな宿題を与えられたらしく、本当に心からすまなそうに『関崎さん！ 申し訳ありませんが、私もいっぱい……スケジュール管理までできそうにありません』と言ったのだ。

そう言われてしまつては、私がやるしかない。いつの間にかCEO秘書としての仕事、私のところに積み上がっていく。

さつき彼に言い渡された仕事の中には、プロジェクト全体が確認できるまとめ資料を継続して作成することも含まれていた。

出張前に渡した資料が役に立ったようで、よかつたと思うべきか、彼と関わる機会が増えたことを嘆くべきか。

だから金曜日の夜だというのに、こうして私は秘書課で一人残業をする事態に陥っている。

本当は手伝いを頼もうと思ったけれど、どうやら今夜は合コンらしい雰囲気のみんなに醸し出され、言い出せなかつた。

私みたいに初恋をこじらせて二十九まで独り身でいるよりも、今のうちに出会いを掴み取るべき

だと思おうしね。

「明日のお見舞いはなんの差し入れしようかな……」

私はふとキーボードを叩く手をとめて、呟いた。

毎週末行くと、溝口さんも申し訳なさそうにするので、適度に空けるようにしている。

検査ばかりで退屈だと言っていたけれど、もうそろそろ詳細な検査結果も出る頃だ。今後の治療方針やら手術の予定やらが決まっていく。そういうのを支えるのは、私じゃない。彼の家族だ。溝口さんとは近いうちに、今より会いにくくなるだろう。

だから会いたいのには、会いに行くのには勇気がいる。

今は、会社のことを伝えるという名目がなくなつてしまつたから。

「まだいたのか」

しんと静まり返っていたオフィスにいきなり低い声が響いて、私はびくつとした。

振り返ると、上着を腕にかけて首元のネクタイを緩めている氷野須王の姿が目に入る。

彼の今日の予定は、出先からそのまま帰宅となつていた。私がそうしたのだから間違いない。

まさか明日から休みが取れるのをいいことに、逆に会社に仕事をしにきたんじゃないだろうな！

「氷野さんこそ、どうされたんですか？」

「忘れものだ。君も遅くならないうちに帰れ」

かすれた声で言い放つた後、プレジデントルームに向かっていく。

……帰れないのは、あなたが大量の仕事を命じたせいですけどね。

後は東南アジアからのメール待ちなのだ。それが確認できさえすれば、気兼ねなく週末を過ごせる。海外で勤務経験のある彼のおかげで、海外への販路を検討していた老舗のお醬油屋さんのアジア進出が現実味を帯びてきたのだ。そういうところはやっぱりすごいと思う。

溝口さんが後継者に彼を指名したのには、海外進出することで地方企業の販路を拡大する狙いもあったのだろう。

私はようやくきたメールの内容を確認して、帰り支度を整えた。

戸締りは氷野さんにお願いいいだろうか、と部屋に近づいた時、がたがたと大きな音がある。

「氷野さん！ どうされました？ 氷野さんっ！」

ノックをして声をかけたけれど返事がない。どうしようか迷ったのは一瞬で、私はドアを開けた。

「氷野さんっ！」

見れば床に膝をついている彼の姿があつて、私は慌てて駆け寄る。

「大丈夫だ……なんでもない」

ひどくかすれた声に、思わず顔をのぞき込む。

額には汗が浮かび、顔色がかなり悪い。

立ち上がろうとする彼を支えるために手を伸ばし、ソファまで誘導した。彼は、だらりと体をソファに預ける。どう考えても大丈夫じゃない。

「大丈夫だ。戸締りはしておくから君は帰れ」

「……熱はあるんですか？」

「……君には関係ない」

「タクシーを呼びます。今夜開いている病院を調べてきます」

「病院は必要ない。明日は休みだし、家に帰って休めばなんとかなる。ここで少し休んだら帰るから、君は気にせず帰れ」

口調にも覇気がなくせに、なにを言っているんだろうと思う。

こんなふうになつても、彼は他人に甘えたり、頼ったりすることができないのだろうか？

溝口さんはこういう時、遠慮せず私を頼ってくれたのに。

溝口さんとは違う、そう思った時、当たり前だ、と気づいた。

だって、私とこの人の間には、上司と部下としての信頼関係さえない。

上司の体調管理も秘書の仕事の一部だとわかつていたのに、私は専属秘書じゃないからという理由でその配慮を怠った。

甘えられないんじゃない。頼れないんじゃない。私が彼にそうさせているんだ。

彼は片手で額を押さえて、それ以上にも言わなかった。きつと私に、これ以上なにかを言う元気もないのだろう。

私はパタパタと動いて、常備していた体温計を持ってきて彼の前に差し出した。

「熱、測ってください。できないなら私が無理やり測りますけど、よろしいですか？」

「君は……」

「病人は黙って言うことを聞いてください。救急車呼びますよ」
私の脅しに屈したのか、彼は奪うように体温計を取り上げた。肩がわずかに上下している。息も少し荒いし、高熱があるに違いない。

私は彼が熱を測っている間に、タクシーを呼び、戸締りとじまりを確認する。
すべてをチェックし終えて部屋に戻ると、体温計がセンターテーブルに置かれていた。
私は体温をチェックして、ため息をついた。

「病院……」
「病院は行かない」

随分きついだらうに、そこだけは断言する。余程、病院が嫌いなのだろう。子どもみたいだ。点滴を打てば楽になるだろうけど、それは最後の手段のようだ。

「立てますか？ それとも警備員を呼びますか？ 私が手を貸すのもいいですか？」

「警備員を呼ぶなんて勘弁してくれ。自分で立てる」

私は自分の荷物と、彼の荷物を手にして、それから少しだけためらったものの、彼の腕を取り立ち上がらせる。さすがに彼は振り払いもせず、文句も言わず歩いた。

『アイスキング』も熱を出すこともあるんだな、とバカなことを思いながら、私はなんとか彼と一緒にタクシーに乗り込んだ。

* * *

氷野須王の住まいはイメージに違わず、会社近くの高級マンションの高層階にあった。距離的にタクシーを呼ぶほどじゃなかったかなと思っただけ、病人だから仕方がない。

タクシーを降りる頃には彼は無言で、体温がどんどん上がっているように感じられて気が気じゃなかった。

部屋の前に着き、彼の代わりにカードキーをかざしてドアを開ける。

「氷野さん、寝室はどちらですか？」

彼が顔を上げて示した場所に、連れて行く。

電気をつけると、十畳ほどの部屋の真ん中に、キングサイズの大きなベッドがあつて、彼はすぐに横たわった。

ベッド横にサイドテーブルとスタンドライトがあるだけで、机も椅子もない。

私は自分の荷物と彼の荷物を床の端っこに置いて、これからどうするか悩んだ。

多分、彼の望みは私がこのまま帰ることだ。

かなり高熱ではあるけれど、いい大人なんだから、一人でなんとかできなくはない……多分。

「悪いが水がほしい。冷蔵庫にあるから頼めるか？」

「わかりました」

私は廊下の奥へ進んで、キッチンを探す。

壁の電気を適当につけると、リビングダイニングが広がっていた。この部屋もモデルルームのよ

うな生活感のなさだ。その奥にはフローリングの書斎があつて、机と本棚が置かれていた。そこは本や資料で埋め尽くされている。

キッチンへ行き、冷蔵庫を開けると瓶のミネラルウォーターがあつて、半分残っていたものとグラスを持って行く。

寝室に戻ってからグラスに水を注いで、彼に渡した。

彼はなんとか体を起こして、ベッドヘッドのクッションにもたれかかる。

「食事は終えたんですか？ お薬はありますか？」

彼が水を飲み干すのを見計らつて、私は聞いた。

そして、彼の答えを待たずに、次の質問もする。

「ご家族の方が、親しい方か、来てくれる人はいいますか？」

「両親は海外。帰国して間もないから、日本の友人とはまだ連絡をとつてない」

「……恋人は？」

ものすごく差し出がましいとは思つたけれどあえて聞いた。恋人がいるなら彼女に任せるのが一番だと思つたからだ。私だつて心置きなく家に帰ることができる。

彼はふつと私を見上げた。熱のせいで潤んだ眼差しは、どことなく色っぽい。

「特定の恋人はいない。呼べば喜んで来そうな相手には何人か心当たりがあるが……見返りも相応に支払う必要がありそうだから、呼ばない」

すらすらと答えてくれるのは、きつと意識が朦朧としていたからに違いない。だつて普段の彼な

ら、こんなプライベートなことを答えたりしないだろう。それにしても、呼べば喜んで来そうな相手が何人もいることに驚きだ。

もちろん本人が望めば女性に不自由しないとは思うけど、礼香が女嫌いだと言つていたから、そんな相手はいないだろうと思ひ込んでいた。

「女嫌い、というわけではないんですね」

思わずポロツと漏らしてしまつて、慌てて口を覆う。

「女嫌い……ね。嫌いというよりは信用していない、というのが正しい。女は男に近づく時、それ相応の見返りを望む。それが金か名誉か見た目か愛かの違いはあれど——」

氷野須王は私の迂闊な発言を気に留めることなく呟いた。

あまりにも重みのある発言で、恋愛経験皆無と言つてもいい私には理解できない。

「君は、俺になんの見返りを求める？」

「なにも求めませんよ。あなたが私の上司で、私が秘書だからやっているだけです。それより、食事はとりましたか？ お薬はおうちにありますか？」

あえて見返りを求めるなら、給料に反映してくれないかな。でもそれは口にはしなかった。彼はぼんやりと私を見つめた後、ふたたびベッドに横たわる。

「氷野さん！」

「食事はしてない。薬はどこかにあるだろうけど覚えてない。君はもう自由にしている」

そのまま、すうっと目を閉じる。

意識を失ってしまったのかと焦って顔をのぞき込むと、寝息が聞こえてきた。汗で前髪が額に張り付いている。ネクタイは外して、シャツの第一ボタンだけは開けているけど、このままの格好じゃ寝苦しいだろう。

ぐるりと部屋を見まわしてみる。クローゼットらしき扉は見つけたものの、そこから着替えを手に出すような勇氣はない。かといって、このまま弱っている上司を放置するのは気が引ける。

「……あなたの言う通り……自由にさせてもらいます」

私は仕方なく彼の部屋のカードキーを手にし、いったん部屋を出た。

* * *

俺が日本に戻ってきたのは久しぶりだった。

今の時期は梅雨で、湿度が高く辟易へまへきしていた。おまけに昼間は蒸し暑いのに、朝晩は涼しい。そんな気温差にも慣れなかった。

風邪などあまり引いてこなかったから、体のだるさに気づくのが遅れた。

こんなふうに住込むのは、何年ぶりだろう――

燃えるように体が熱くて寝返りを打つ。俺の額に冷たいものが置かれて、その心地よさに息を吐いた。ぼそぼそとやわらかな声が聞こえては、首にも冷たいものが行き来する。

ふたたび額に冷たいものが置かれて、意識が浮上した。

「あ、気づきました？」

ぼやけた視界にメガネが映る。その人物の輪郭りんかくを捉とらえようと、見覚えのある顔がほつと表情を緩めるのがわかった。いつもは口をきゅつと結んで、俺を睨にらむように見えてくるから、そんなやわらかな表情はできないんじゃないか、と思っていた。

「よかった。汗びっしょりだから着替えないと、このままじゃ余計に悪化します。それから、食欲はないかもしれませんが、少しでも召し上がってください。お薬を飲むためにも」

「……まだいたのか」

なんている？ と聞きそうになってやめた。

警備員や救急車の世話にならずに済んだのは、彼女が俺の要求通りに動いてくれたからだ。

「私に帰ってほしければ、せめて着替えてお薬を飲んでください。そこまで見届けたら帰ります。

それ以上の余計なことはしません」

――自由にしている、と言ったのは氷野さんですよ。だから自由にさせてもらいました、そう彼女が続ける。

シャツもズボンも汗で張り付いて気持ちが悪かった。彼女の言う通り、着替えたほうがよさそうだ。

「クローゼットの一番上の引き出しに部屋着がある。取ってくれ」

関崎凛は一瞬だけクローゼットと俺を戸惑うように見た後、おずおずとクローゼットに近づいて扉を開けた。仕事では言われたことをテキパキやるのに、こういうことは慣れていないように見